教科書文庫
4
815
41-1936
2000039770

訂改 中學國文典

上級用

41855
教科書文庫
4
815
41-1936
20000
39770

文部省檢定濟
昭和十一年十二月二十四日　中學校國語漢文科

教科書文庫
4
815
41-1936
2000039770

改訂 中學國文典 上級用

廣島高等師範學校附屬中學校國語漢文研究會著

京極書店發行

広島大学図書
2000039770

資料室
375.9
Hi18

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 39770 圖書

例言

一　本書は前に編纂した中學國文典上級用を改訂したものである。

一　初年級に於ける既習事項との連絡をとる爲、用言及び助動詞の種類・活用を簡明に擧げ、なほ初年級に於ける既習事項の殆ど全部を表として卷末に附した。

一　助動詞の接續は、動詞の活用による分類が記述の上からは簡便であるが、實用としては助動詞個々につき記憶するが便であり、又體言及び形容詞との接續をも併せ説く便宜から、各助動詞につき個々に述べた。

一　「誤り易い語法」の如きは、別に章を設けず、多くの練習問題を出して、其の習熟を期した。

一　教へ易く學び易く、然も十分の學力を養はんが爲、すべて本文の說明は簡明にし、練習題の外に特に自修題を附し、餘裕の有る者の練習に便した。

昭和十一年八月

著者識

改訂中學國文典　上級用

目次

第一篇　單語篇……一
第一章　名詞の種類……一
第二章　代名詞の種類・稱……四
第三章　文語用言の活用の種類及び活用……八
第四章　文語助動詞の種類及び活用……一八
第五章　文語助動詞の接續……二五
用言・體言と助動詞との接續……二五
一　時の助動詞……二五
二　受身(可能・崇敬)の助動詞……二六

三　可能の助動詞……二七
四　使役(崇敬)の助動詞……二八
五　崇敬の助動詞……二八
六　推量の助動詞……二八
七　打消の助動詞……二九
八　指定の助動詞……三〇
九　咏嘆の助動詞……三〇
一〇　願望の助動詞……三一
一一　比況の助動詞……三一
助動詞相互の接續……三一
第六章　口語用言の活用の種類及び活用……三七
第七章　口語助動詞の種類及び活用……四三
○第八章　口語助動詞の接續……四九

用言・體言と助動詞との接續……四九
一　時の助動詞……四九
二　受身(可能・崇敬)の助動詞……五〇
三　可能の助動詞……五一
四　使役の助動詞……五一
五　崇敬の助動詞……五一
六　推量の助動詞……五二
七　打消の助動詞……五二
八　指定の助動詞……五三
九　願望の助動詞……五三
一〇　比況の助動詞……五三
助動詞相互の接續……五四
○第九章　注意すべき助詞の用法……五七
一　に・へ……五七

二　ば……五七
三　も……五八
四　ど・ども……六〇
五　な・そ……六一
六　と……六二
七　だに・すら・さへ……六三
八　ばや・なむ……六四
九　や・か……六五
一〇　係結の法則……六九
第一〇章　品詞の轉成……七九
第二篇　文章篇……七九
第一章　文の成分……七九
第二章　文の成分の位置及び省略……八六
一　正常の場合……八六
二　倒置の場合……八六
三　省略の場合……八七
第三章　節……九〇
第四章　主部・述部・補部・敍述部……九五
第五章　文の種類……九九
單文……九九
複文……一〇〇
重文……一〇一
自修題補遺

附錄
文法上許容ニ關スル事項
表
一　動詞活用表
二　形容動詞活用表・形容詞活用表
三　文語動詞活用識別表・動詞假名遣識別表・用言音便表
四　助動詞の活用と接續表

目次終

東京大學圖書之印

改訂 中學國文典 上級用・

第一篇　單語篇

第一章　名詞の種類

固有名詞
普通名詞

固有名詞と**普通名詞**

一　東郷大將は、明治に限らず日本に限らず、古今東西に亙つての英雄だ。

二　富士山は世界に於ける名山なり。

右の二重傍線を施した語のやうに、地名・人名・年號等をあらはす名詞を**固有名詞**といふ。

固有名詞に對し、右の一重傍線を施した語のやうに、一般の名詞を**普通名詞**といふ。

「太閤」「黄門」等は元來普通名詞であるが、それが特に「豐臣秀吉」「德川光圀」等を指す場合は固有名詞である。

數詞

名詞には右の外に「五」「八リットル」「第一番」のやうに、事物の數量順序をあらはす**數詞**がある。

練習題

次の文中から名詞を選び出し、其の種類をいへ。

(1) 今日は木曜です。然し午後には誰も來ません。

(2) 桓武天皇の御時、都を今の京都に遷された。

(3) 源氏物語は紫式部の書いた有名な小説である。

(4) 林家は德川幕府に仕へたる儒家にて、代々大學頭なりき。

(5) 渡邊競は源三位入道頼政の士には第一のものなり。

自修題

(1) 大正十年五月十一日、水曜、我が皇太子殿下は、ロンドン市役所の歡迎會に台臨になつた。閑院宮殿下を始め供奉員一同も隨伴した。

(2) 私はスワン萬年筆を使用することにしてゐます。

(3) 菊池男爵は教育勅語の講釋にイギリスへ出向かはれた。

(4) 月なゝめなる時計臺、二つの針の重なりて、打つも重しや時の數。

(5) 目出度さも中位なりおらが春。

(6) 神の月日はこゝにも照る。

自稱
對稱
他稱
不定稱

第二章　代名詞の種類・稱

人代名詞の稱

人代名詞は其の指示するものによつて、左の四つの稱に分けられる。

自稱……自分を指す語

對稱……相手を指す語

他稱……第三者を指す語

不定稱……不定のものを指す語

自稱	對稱	他稱	不定稱
わ われ わたくし 僕	なんぢ(汝) あなた 君	かれ(彼) あの方	たれ(誰) どなた

指示代名詞の稱

指示代名詞は其の指示する事物・場所・方向の遠近によつて、近稱・中稱・遠稱・不定稱の四つの稱に分けられる。

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ これ	そ それ	かれ あれ	なに いづれ どれ
場所	ここ ここ	そこ そこ	かしこ あそこ	いづこ どこ どこら
方向	こなた こちら	そなた そちら	かなた あなた あちら	いづかた いづち どちら

この・その・かの・あの・どのは本來代名詞こ・そ・か・あ・どに助詞のが添うた

ものであるが、現代では一語としてその下に來る體言を指すだけに用ひられて、他の代名詞と稍〻意味の上に差があるが、しかし便宜上一代名詞として取扱つてよい。

練習題

次の文中から代名詞を選び出し、其の種類・稱をいへ。

(1) 日本よ、お前は不思議な國だ。
(2) こいつは甚だ不都合な男だ。
(3) あの人は自分の利益ばかりはかつてゐる。
(4) 余は親しく彼等の崇嚴なる數分間の問答を聽けり。
(5) 諸子よ、諸子は嘗て死を考へしことありや。
(6) 嗚呼、別れたる我が友、今何處にかある。
(7) 遙か彼方に書生とおぼしく、詩吟の聲聞ゆ。
(8) 我は此處に我が友と相語りつゝ今宵一夜をあかさん。
(9) そなたには悉なくお暮しなされ候や。
(10) 御身いかなる人にましますかや。

自修題

(1) お前は一體何を落してそんなにこゝを探してゐるのですか。
(2) 某なほ一言あり、抂げて聞きたまへ。
(3) われ足下を宿せる日よりさせるもてなしをなしえず。
(4) 汝(ナレ)は誰(タ)ぞ。そを何處にか負ひて行く。
(5) かの殿は狩のかへるさに、工藤とやらんに討たれ給ひぬ。
(6) おのれは如何なる者ぞ。

第三章　文語用言の活用の種類及び活用

文語動詞

(イ)　正格活用

一　四段活用

行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ	書く	か	か	き	く	く	け	け
ガ	漕ぐ	こ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
サ	押す	お	さ	し	す	す	せ	せ
タ	打つ	う	た	ち	つ	つ	て	て
ハ	買ふ	か	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
バ	飛ぶ	と	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
マ	讀む	よ	ま	み	む	む	め	め

四段活用

上二段活用

ラ	降る	ふ	ら	り	る	る	れ	れ

右の例のやうに、四段活用の動詞は、五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に活用し、カ(ガ)・サ・タ・ハ(バ)・マ・ラの各行にある。

二　上二段活用

行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ	起く	お	き	き	く	くる	くれ	きよ
ガ	過ぐ	す	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
タ	落つ	お	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
ダ	閉づ	と	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
ハ	強ふ	し	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
バ	延ぶ	の	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
マ	試む	こゝろ	み	み	む	むる	むれ	みよ

ヤ	老ゆ	お	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ラ	懲る	こ	り	り	る	るる	るれ	りよ

右の例のやうに、上二段活用の動詞は、五十音圖のイ・ウの二段に活用し、連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふもので、カ(ガ)・タ(ダ)・ハ(バ)・マ・ヤ・ラの各行にある。

上一段活用

三　上一段活用

行	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ	著る	(き)	き	きる	きる	きれ	きよ
ナ	似る	(に)	に	にる	にる	にれ	によ
ハ	干る	(ひ)	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
マ	見る	(み)	み	みる	みる	みれ	みよ
ヤ	射る	(い)	い	いる	いる	いれ	いよ
ワ	居る	(ゐ)	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ

右の例のやうに、上一段活用の動詞は、五十音圖のイの段にだけ活用し、終止形と連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふもので、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行にある。

この活用に屬する語は、右の表の語の外、煮る・顧みる・惟みる・鑑みる・試みる・鑄る・率ゐる等の數語に限つてゐる。

下二段活用

四　下二段活用

行	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ア	得	(う)	え	う	うる	うれ	えよ
カ	受く	う	け	く	くる	くれ	けよ
ガ	投ぐ	な	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げよ
サ	載す	の	せ	す	する	すれ	せよ

ザ	混ず	ま	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
タ	捨つ	す	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ダ	撫づ	な	で	で	づ	づる	づれ	でよ
ナ	兼ぬ	か	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
ハ	堪ふ	た	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
バ	延ぶ	の	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ
マ	擧む	ほ	め	め	む	むる	むれ	めよ
ヤ	消ゆ	き	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
ラ	枯る	か	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
ワ	植う	う	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ

右の例のやうに、下二段活用の動詞は、五十音圖のウ・エの二段に活用し、連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふもので、全行及びガ・ザ・ダ・バの各行にある。この活用に屬する語の中、ア行には得の一語、ワ行には植う・飢う・据うの三語に限つてゐる。

五　下一段活用

行	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カ	蹴る	(け)	け	ける	ける	けれ	けよ

右のやうに、下一段活用の動詞は、五十音圖のエの段にだけ活用し、終止形と連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふもので、これに屬する動詞は、蹴るの一語であるが、此の語は今は四段活用に使はれることもある。

(ロ)　變格活用

六　カ行變格活用(カ變)

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
來る	(く)	こ	き	く	くる	くれ	こよ

カ變の動詞は、來の一語だけであつて、右のやうに活用する。

サ行變格活用

七　サ行變格活用（サ變）

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
爲	（す）	せ	し	す	する	すれ	せよ

サ變の動詞は、右のやうに活用し、爲の一語だけであるが、この語が他の語に添うて多くのサ變の動詞を作ることが出來る。

例へば、

勉強す　登山す　發す　論ず　歎ず　報ず

旅す　罪す　全うす　空しうす

重んず　先んず　輕んず

ナ行變格活用

八　ナ行變格活用（ナ變）

ナ變の動詞は、右のやうに活用し、死ぬの外に往ぬの語があるが、今は方言の外は使はれない。

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

ラ行變格活用

九　ラ行變格活用（ラ變）

語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
有り	あ	ら	り	り	る	れ	れ

ラ變の動詞は右のやうに活用し、有りの外居り・侍りの二語があるが、今は居りが四段に使はれるだけで、侍りはあまり使はれない。

形容動詞

形容動詞

種類	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
第一（烈しかり）	烈しか	ら	り		る	れ	れ

第二	靜かなり	**靜かな**	ら	り	り	る	れ	れ
第三	堂々たり	**堂々た**	ら	り	り	る	れ	れ

右の例のやうな語は、形容詞の連用形(烈しく)又は副詞(靜かに・堂々と)にラ變のありが添ひ、其の形の約つたもので、性質は形容詞と同じく、形はラ變の動詞と同じであるから、形容動詞と名づけてゐる。

文語の形容動詞はラ變の動詞と見なす。

第一種の終止形・已然形は今は殆ど使はれない。

文語形容詞

種類	語幹	語尾 未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	高し	**たか**	く	く	し	き	けれ
シク活用	樂し	**たの**	しく	しく	し	しき	しけれ

右の例のやうに、形容詞には二種の活用があつて、何れもカ行・サ行に跨がつて活用し、其の活用形には命令形がない。

練習題

一、次の文語の動詞・形容詞の活用表を作れ。

仰ぐ　朽つ　懲る　交ず　消ゆ　据う　悔ゆ　見る　嗅ぐ　居り
吠ゆ　任す　殖ゆ　生ふ　生ゆ　命ず　案ず　絶ゆ　飢う　強ふ
來　鑑みる　報ゆ　植う　寂し　悲し　ゆかし　うまし

二、次の文中から形容動詞を選び其の種類をいへ。

(1)　樫は堅くして彈力に富めるが故に、強烈なる力を受くるものを作るに適せり。

(2)　彼の堂々たる態度に感ぜざるもの無かりき。

第四章　文語助動詞の種類及び活用

一　時の助動詞

時の助動詞

完了

過去

(イ)　完了の助動詞　つ・ぬ・たり・り

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
り		り	り	る		

(ロ)　過去の助動詞　き・けり

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き		き	き	し	しか	
けり		けり	けり	ける	けれ	

未來

(ハ)　未來の助動詞　む(ん)

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む			む	む	め	

未來の助動詞むは同時に推量の意をあらはし、又意志をあらはすこともある。

受身の助動詞

二　受身の助動詞　る・らる

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	るる	れる	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	られる	られよ

可能の助動詞

三　可能の助動詞　る・らる・べし・べかり

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	るる	れる	

らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ
べかり	べからべかり				

べかりの未然形に打消のずがつく時は、不能の意をあらはす外に禁止の意をもあらはす。

四　使役の助動詞　す・さす・しむ

使役の助動詞

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

五　崇敬の助動詞　る・らる・す・さす・しむ

崇敬の助動詞

る・らるは受身、す・さす・しむは使役の場合と活用が同じである。

す・さす・しむは下にらる・給ふ等の添ふ場合が多い。隨つて今は未然形・連用形の外は餘り使はれない。

崇敬の意をあらはすには、右のやうな助動詞の外に、**給ふ・おはします・ます・ます・奉る・侍り・候**といふやうな動詞が轉じて使はれる場合がある。

推量の助動詞

六　推量の助動詞　らむ・らし・べし・めり・けむ・まし

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らむ			らむ	らむ	らめ	
らし		らしく	らし	らしき		
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
めり			めり	める	めれ	
けむ			けむ	けむ	けめ	
まし			まし	まし	ましか	

けむは、過去の推量である。

らむ・けむは文章中ではらん・けんと書くことが多い。

べしは、可能・推量の意をあらはす外に、命令・義務・意志等の意をあらはすことがある。

らしは古くはらし(終止)らし(連體)らし(已然)と活用してゐた。

打消の助動詞

七　打消の助動詞　ず・ざり・じ・まじ

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり		ざる	ざれ	ざれ
じ			じ	じ	じ	
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	

じ・まじは打消の推量の意となる外に、決意をもあらはす。

指定の助動詞

八　指定の助動詞　なり・たり

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

咏嘆の助動詞

九　咏嘆の助動詞　なり・けり

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり			なり	なる	なれ	
けり			けり	ける	けれ	

願望の助動詞

一〇　願望の助動詞　たし・まほし

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	

一一　比況の助動詞　如し

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
如し	如く	如く	如し	如き		

如しは轉じて推量の意に使はれることがある。

右のやうに、助動詞には、(一)動詞に似た活用のもの、(二)形容詞に似た活用のもの、(三)獨特の活用のものがある。

練習題

一、文語助動詞を活用の形によつて分類せよ。

二、文語助動詞の中、同じ形の語で幾樣かに使はれるものを選び、其の場合を述べよ。

第五章　文語助動詞の接續

用言・體言と助動詞との接續

一　時の助動詞

(イ)　完了

時　完了

つ……全動詞の連用形　　遂に逃れ果てつ。

ぬ……ナ變以外の連用形　　日は傾きぬ。

（ナ變にはつかない）

たり……全動詞の連用形　　傷を受けたり。

り……四段の已然形　　書を讀めり。

サ變の未然形　　登山せり。

(ロ)　過去

過去

き……全動詞の連用形　昔、高僧ありき。

但し、きがカ變・サ變につく時は、左のやうになる。

	未然	連用
カ變	來(コ)しし しか	來(キ)しし しか
サ變	爲(セ)しし しか	爲(シ)き

終止形きはカ變にはつかない。

又、サ行四段にし・しかがつく時、「暮しし時」「過ししかば」となるべきを「暮せし時」「過せしかば」となる類は差支ない。

けり……全動詞の連用形　花散りけり。

(ハ)　未來

む……全動詞の未然形　我も行かむ。

二　受身(可能・崇敬)の助動詞

未來

受身(可能・崇敬)

る……四段・ナ變・ラ變の未然形

父に叱らる。
母に死なる。
此處に居らる。

らる……右以外の未然形

馬に蹴らる。
よく了解せらる。
早く來らる。

らるがサ變につく時、「罪せらる」「評せらる」「解釋せらる」となるべきを、「罪さる」「評さる」「解釋さる」となる類は差支ない。

可能

三　可能の助動詞

べし……ラ變の連體形　かゝる事もあるべし。

右以外の終止形　女も登るべし。

べからず……同前　汝は行くべからず。

べかり……同前　我も參加すべかりしに。

使役（崇敬）

四　使役（崇敬）の助動詞

す……四段・ナ變・ラ變の未然形

（舟を漕がす。
彼を死なす。
父宮に侍らせらる。）

さす……右以外の未然形

（弓を射さす。
木を植ゑさせ給ふ。）

さすがサ變につく時、「手習せさす」「周旋せさす」「賣買せさす」となるべきを「手習さす」「周旋さす」「賣買さす」となる類は差支ない。

崇敬

しむ……全動詞の未然形

（競爭せしむ。）

「得しむ」といふべきを「得せしむ」といふことは差支ない。

五　崇敬の助動詞（受身・使役の條參照）

推量

六　推量の助動詞

らむ……ラ變の連體形
右以外の終止形

（何れの處にてあるらむ。
物思ふらむ。）

らし……同前

（家有るらし。
紅葉散るらし。）

べし……同前

（かゝる事もあるべし。
やがて發表すべし。）

めり……同前

（かくこそ侍るめれ。
雨降るめり。）

けむ……全動詞の連用形

（いづち行きけむ。）

まし……全動詞の未然形

（春の心は長閑けからまし。）

打消

七　打消の助動詞

ず……全動詞の未然形

（未だ消えず。）

ざり……同前　　全く知らざりき。
じ……同前　　未だ散らじ。
まじ……ラ變の連體形　　かゝる事は有るまじ。
右以外の終止形　　俄には來まじ。

八　指定の助動詞

なり……全動詞の連體形　　月出づるなり。
形容詞の連體形　　水淺きなり。
體言　　孔子は聖人なり。

たり……體言にだけつく　　不世出の英傑たり。

九　咏嘆の助動詞

なり……ラ變の連體形　　かくこそ今は侍るなれ。
右以外の終止形　　蟲の聲すなり。

けり……全動詞の連用形　　道はありけり。

一〇　願望の助動詞

たし……全動詞の連用形　　運動會を見たし。
まほし……全動詞の未然形　　早く知らまほし。

一一　比況の助動詞

如し……全動詞の連體形　　水の流るゝ(が)如し。
形容詞の連體形　　やゝ重きが如し。
體言　　落花雪の如し。

如しは活用語につく時は、多く助詞がを挾み、體言につく時は必ずのを挾む。

助動詞相互の接續

助動詞相互の接續は、大體動詞と助動詞との接續に準じて知る。

ことが出來る。卽ち、動詞の未然形につく助動詞は、動詞に似た活用の助動詞の未然形につき、その他、連用形・終止形・連體形等につく場合も同樣である。

宮は既に落ち　さ　せ　られ　たり　けり

師を擇びて學ば　しめ　らる　べし。

べし・べかり・らむ・らし・めり・まじ・なり（咏嘆）等のやうに、動詞のラ變に限り連體形につき、その他には終止形につくものは、ラ變に似た活用の助動詞にはやはり連體形につき、その他の助動詞には終止形につく。

明日は晴天　な　る　べし。

かゝる事もあり　ぬ　べし。

大いに努力せ　ざ　る　べから　ず。

子供には飲ま　し　む　べから　ず。

なり・如しのやうに形容詞の連體形につく助動詞は、形容詞に似た活用の助動詞の連體形につく。

かゝる行は、す　ま　じ　き　なり。

祖先を尊敬すべきは、親を尊敬す　べ　き　が　如し。

練習題

一、次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び接續について述べよ。

(1) 枯れたる木に花を咲かせたる例もあり。

(2) いかなる人なりけん、たづね聞かまほし。

(3) 餘りに遲かりしかば、人をしてうかゞはしむ。
(4) 生きて一鄕の爲に盡くせる人は、死して一鄕の爲に惜しまる。
(5) 勝海舟若き頃西洋式兵術を學びしが、常に良書の得難きを歎ぜり。
(6) 大空にそびえて見ゆるたかねにものぼればのぼる道はありけり。

二、次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

(1) 此の品物に手を觸るべからず。
(2) 再びかゝる惡事はするまじ。
(3) 彼よりの手紙を受けり。
(4) 汽車に注意すべし。
(5) 遠き路をも厭はずしてかゝる田舍に來き。
(6) 不都合のこと有らすな。

自修題

一、次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び接續について述べよ。

(1) 行交ふ村人の取りつくろはぬ言の葉手に取る如く聞かる。
(2) 洗ひ清めんとするものの少きこそ心得ね。
(3) 我が夢はいづくの山にやあらん驅けめぐりつ。
(4) 秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる。
(5) あはれ今年の秋も往ぬめり。
(6) 此の人なからましかば、如何になりなましとこそ覺えしか。

二、次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

(1) 雷にうたれて死にぬ。

(2) 濱の眞砂は盡きまじ。
(3) 斥候をして敵狀を見せしむ。
(4) やがて油も盡くるらし。
(5) 彼方の山の朧なるは霞の之を隔つなり。
(6) 奮鬪しし甲斐ありて見事成功したりき。
(7) 今日遠方より友來き。
(8) 新年を迎ふると共に一年の計を立つを忘るゝべからず。
(9) 言々句々肺肝より出で、溢る如き熱誠にみちたり。
(10) 飛ぶ鳥を射さしむるに射ずといふことなし。

三、助動詞を動詞の未然形・連用形・終止形・連體形・已然形につくものに分類して表をつくれ。

第六章　口語用言の活用の種類及び活用

口語動詞

(イ) 正格活用

一　四段活用

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語	書く	か	き	く	く	け	け
口語	書く	か	き	く	く	け	け

右の例のやうに、文語の四段は、口語でも同じである。

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語	死ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
口語	死ぬ	な	に	ぬ	ぬ	ぬ	ね

四段活用

上一段活用

右の例のやうに、文語のナ變及びラ變は、口語では四段となる。

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語 有り	あ	ら	り	り	る	れ	れ
口語 有る	あ	ら	り	る	る	れ	れ

二　上一段活用

右の例のやうに、文語の上二段は、口語では上一段となる。

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語 起く	お	き	き	く	くる	くれ	きよ
口語 起きる	お	き	き	きる	きる	きれ	きよ きろ

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語 著る	(き)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
口語 著る	(き)	き	き	きる	きる	きれ	きよ きろ

下一段活用

右の例のやうに、文語の上一段は、口語でも同じである。

三　下一段活用

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語 受く	う	け	け	く	くる	くれ	けよ
口語 受ける	う	け	け	ける	ける	けれ	けよ けろ

右の例のやうに、文語の下二段は、口語では下一段となる。

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語 蹴る	(け)	け	け	ける	ける	ける	けよ
口語 蹴る	(け)	け	け	ける	ける	ける	けよ けろ

カ行變格活用

四　カ行變格活用（カ變）

（ロ）變格活用

右の例のやうに、文語の下一段は、口語でも同じである。

サ行變格活用

五　サ行變格活用（サ變）

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語	來	（こ）	き	く	くる	くれ	こよ
口語	來る	（こ）	き	くる	くる	くれ	こい

右の例のやうに、文語ヵ變は、口語では終止形と命令形とが違ふ。

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
文語	爲	（す）	せ	し	す	すれ	せよ
口語	爲る	（す）	せ し	し する	する する	すれ すれ	せよ しろ

右の例のやうに、文語のサ變は、口語では終止形が違ふ外、未然形・命令形に二樣の言ひ方がある。

形容動詞

ク活用

形容動詞

種類	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
第一（烈しい）	烈し	から	かつ				
第二	靜かだ	だら だつ	だ	な	なら		

右の例のやうに、口語の形容動詞は、文語と餘程違つてゐる。第二種を丁寧にいふ場合は、でせ(う)でし(た)です のやうに活用する。

口語形容詞

一　ク活用

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然(文)假定(口)
文語	高し	く	く	し	き	けれ
口語	高い	く	い	い	い	けれ

シク活用

二　シク活用

	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然(文)假定(口)
文語	樂し	たの	しく	しく	し	しき	しけれ
口語	樂しい	たの		しく	しい	しい	しけれ

右の例のやうに、口語の形容詞の活用には未然形がなく、又終止形・連體形が文語とは違ふ。

練習題

次の文語の動詞・形容詞を口語にかへて、その活用表を作れ。

死ぬ　有り　來　丁寧なり　居る　居り　似る　爲す　落つ
越ゆ　受く　起く　恥づ　踏む　暑し　多かり　新し　涼し

時の助動詞
過去
未來

第七章　口語助動詞の種類及び活用

一　時の助動詞

(イ)　過去の助動詞　た(だ)

活用／語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	たら	たり	た	た		

たはだとなることがある。

口語では過去と完了との區別がない。

(ロ)　未來の助動詞　う・よう

活用／語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
う			う			
よう			よう			

う・ようも文語のむと同じやうに推量・意志をもあらはす。

受身の助動詞

二　受身の助動詞　れる・られる

活用／語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ れろ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ られろ

可能の助動詞

三　可能の助動詞　れる・られる

活用は受身の場合と同じである。但し、命令形はない。

使役の助動詞

四　使役の助動詞　せる・させる

活用／語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ せろ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ させろ

崇敬の助動詞

五　崇敬の助動詞　れる・られる・ます

活用／語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ まし

れる・られるの活用は、可能の場合と同じである。

右の外、**せられる・させられる・あそばす・なさる・いたします・まします**等の合成語が使はれる。これ等は便宜上一つの助動詞として取扱つてよい。

推量の助動詞

六　推量の助動詞　らしい

活用／語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい	らしく	らしい	らしい	らしい		

打消の助動詞

七　打消の助動詞　ぬ・ない・まい

活用語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ぬ		ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね	
ない		なく	ない	ない	なけれ	
まい			まい			

まいは文語のじ・まじと同じやうに、打消の推量の意をあらはす外に、決意をもあらはす。

指定の助動詞

八　指定の助動詞　だ・です

活用語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
だ	だら	だつ	だ		なら	
です	でせ	でし	です			

だ・ですが活用語の下に添ふ時にはのだ・のですとなる。

願望の助動詞

右の外、であるといふやうによく使はれる。

九　願望の助動詞　たい

活用語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい		たく	たい	たい	たけれ	

比況の助動詞

一〇　比況の助動詞　やうだ・やうです・やうであるといふ合成語が使はれる。

活用語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなら	

やうです・やうであるの活用はです・あると同じである。

右の各語は、文語の如しと同じやうに、轉じて推量の意に使はれることがある。

詠嘆の意は助詞ねえ(なあ)等を添へてあらはし、別に助動詞はない。

練習題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

(1) 前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。
(2) まさか行暮れて困ることもあるまい。
(3) 日は富士の背に落ちようとしてゐる。
(4) 強い風がごう〳〵と高い空を翔つてゐるらしい。
(5) しばらくお待ちを願ひます。そのうちに歸つて來るでせう。
(6) 法事の馳走に人を呼んだり、呼ばれたりすることが、年中の最も大きな歡樂の一つとされてゐる。

時

第八章　口語助動詞の接續

用言・體言と助動詞との接續

一　時の助動詞

た……全動詞の連用形　日が暮れた。

だ……四段の連用形ぎ・に・び・みが音便になる時。
　　漕いだ。(漕ぎた)
　　死んだ。(死にた)
　　叫んだ。(叫びた)
　　讀んだ。(讀みた)

う……四段の未然形　やがて雪が降らう。

よう……右以外の未然形　やがて日が暮れよう。

サ變に添ふ時は「せよう」といはないで「しよう」といふ。

受身（可能・崇敬）

二　受身（可能・崇敬）の助動詞

れる……四段の未然形

私は叱られた。
私にも讀まれる。
父上が行かれる。

られる：右以外の未然形

兄は譽められた。
子供にでも攀ぢられる。
父上はもう寢られた。

可能動詞

れるが四段に添うて「讀まれる」「書かれる」などといふべきを、約して「讀める」「書ける」などといふやうに使はれることが多い。此の場合には、之を一語と見て**可能動詞**といふことがある

られるがサ變に添うて「缺席せられる」「全うせられる」などといふべきを、約して「缺席される」「全うされる」などといふ事があるが、これ等は一語と見ず、元の形に返して動詞と助動詞とに分解するがよい。

可能
使役
崇敬

三　可能の助動詞（前條參照）

四　使役の助動詞

せる……四段の未然形　よく銃を磨かせる。

させる：右以外の未然形　何度も試みさせる。

させるがサ變に添うて「掃除せさせる」「全うせさせる」などといふべきを、約して「掃除させる」「全うさせる」などといふ事があるが、これ等も元の形に返して動詞と助動詞とに分解するがよい。

五　崇敬の助動詞

ます……全動詞の連用形　澤山有ります。

れる・られるは受身の條參照。

推量

六　推量の助動詞

らしい……全動詞の終止形　やがて潮が引くらしい。
　形容詞の終止形　餘程苦しいらしい。
　體言　あれは僕の弟らしい。

打消

七　打消の助動詞

ぬ……全動詞の未然形（但し有るには添はない）　そんなに早くは出來ぬ。
ない……同前　友人がなか〳〵來ない。
まい……四段の終止形　もう泣くまい。
　右以外の未然形　まだ實が落ちまい。
　サ變に添ふ時には「せぬ」「しない」「しまい」となる。

指定

八　指定の助動詞

だ……全動詞の連體形（但し助詞のを伴なつてのだとなる）　夜が明けるのだ。
　形容詞の連體形　隨分高いのだ。
　體言　彼は秀才だ。

です……同前　もう死ぬのです。
　隨分高いのです。
　彼は秀才です。

願望

九　願望の助動詞

たい……全動詞の連用形　あくまで強く生きたい。

比況

一〇　比況の助動詞

やうだ（やうです・やうである）

全動詞の連體形　遠雷が轟くやうだ。
形容詞の連體形　外は暗いやうだ。
體言（助詞のを挾む）　大砲の音が遠雷のやうだ。

助動詞相互の接續

口語助動詞相互の接續も文語の場合と同じやうに、用言との接續に準じて知ることが出來る。

人を擇んで行かせられたい。
多分母が出したのでせう。
彼は知らないらしいのだ。

練習題

一、次の文中から助動詞を選び出し、其の種類・接續を説明せよ。

(1) ちとお遊びにいらつしやいませ。
(2) 行かうと思へば何時でも行かれる。
(3) 先生がさういはれました。
(4) 珍しい本を見せて下さいました。
(5) 隨處に吾等を滿足させるものがあるのが武藏野の特色だらう。
(6) 何かの必要で路を尋ねたいと思つたら、畑に居る農夫に聞き給へ。
(7) もはや調べさせる必要はないらしい。
(8) 悔いてもかひのないことでした。

二、次の文中の誤を正し、其の理由をいへ。

(1) そんなことは恐らく言うまい。
(2) 君も行きたまへ。僕も行こう。
(3) とてもだめだろうが、もう一度やつてみやう。

(4) そんな亂暴なことはするまいと思ふがどうだろう。
(5) 光陰は矢のようだ。

自修題

一、次の文の誤を正し、其の理由をいへ。
(1) 使命を全うして歸るでしよう。
(2) 死のうが生きやうが、それは問題でない。
(3) 君の思ふやうに改めささうとしても、彼はなか〳〵承知すまい。
(4) 朝早く起きやうと思へば、起きられないことはなかろう。

二、次の助動詞を用ひて各一つづつ短文を作れ。
らしいの連用形　ますの命令形　ぬの連用形　られる(崇敬)の未然形　たの連用形　ですの未然形　させるの連體形

第九章　注意すべき助詞の用法

一　に・へ　　に・へ

東京に行く。(文)　東京に行く。(口)
彼方へ行く。(文)　東京へ行く。(口)
　　あちらへ行く。(口)
　　あちらに行く。(口)

右の例のやうに、文語ではには場所を、へは方向を示す場合に使はれるが、口語では混同して使はれる。

二　ば　　ば

(イ) 假定の意をあらはす場合　活用語の未然形に添ふ。
明日雨降らば、遠足は中止すべし。

水清くば、大魚棲まじ。
父上も賛成ならば、汝も行くべし。

(ロ)　既定の意をあらはす場合　活用語の已然形に添ふ。

今日雨降れば、遠足は中止す。
水清ければ、大魚棲まず。
父上も賛成なれば、汝も行くべし。

口語では、假定形にばを添へて假定の意をあらはし、既定の意をあらはすには、終止形にので・から等を添へる。

明日雨が降れば、遠足は中止しよう。
今日は雨が降るから、遠足は中止する。

三　とも

動詞(動詞に似た活用の助動詞)の終止形、形容詞(形容詞に似た

活用の助動詞)の未然形に添うて假定の意をあらはす。

人笑ふとも、意に介せじ。
如何に非難せらるとも、頓着せじ。
悲しくとも、泣くな。
行きたくとも、辛棒せよ。

但し、連體形に添ふ習慣あるものは、それに從つても差支ない。

數百年を經るとも……
如何に批評せらるとも、……

口語では、ても(でも)を使ひ、活用語の連用形に添ふ。

今更泣い(泣きの音便)ても、駄目だ。
悲しく(う)ても、泣くな。
いくら留められてもやめない。

ど・ども

薬を飲ん(飲みの音便)でも癒らぬ。

四　ど・ども

活用語の已然形に添うて、既定の意をあらはす。

人笑へども(ど)、意に介せず。

悲しけれども(ど)、泣かず。

數回讀みたれども(ど)、理解せられず。

假定又は既定の意をあらはす場合、誤解を生じない限り、とも・どもの代りにもを使つても差支ない。

何等の事由あるも(ありとも)、議場に入ることを許さず。

期限は今日に迫りたるも(たれども)、準備は未だ成らず。

口語ではけれどもを使ひ、終止形に添ふ。

人が笑ふけれども、意に介しない。

な・そ

と

悲しいけれども、泣かない。

數回讀んだけれども、理解せられない。

五　な・そ

なは上につき、そが、カ變・サ變の動詞の未然形、その他の動詞(助動詞)の連用形に添うて、禁止の意をあらはす。

な來(コ)そ。　な爲(セ)そ。　な死にそ。　な行かせそ。

六　と

(イ)　並列の意をあらはす場合　體言に添ふ外、活用語には、その連體形に添ふ。

これ德あると德なきとによるなり。

並列のとは上の語句の一々に皆添へるべきであるが、紛れぬ場合に限り、最終のとを省いても差支ない。

宗教と道德の關係を論ず。

省いてならぬ場合

甲と乙の兄が來た。（甲と乙との兄が來た。／甲と乙の兄とが來た。）

（ロ）上文を指示する場合　活用語の終止形に添ふ。

朝日昇ると思ふ間もなく、……

運命も盡きぬと見えたり。

但し、連體形に添ふ習慣あるものは、それに從つても差支ない。

月出づると見えて、……

嘲弄せらるゝと思ひて、……

七　だに・すら・さへ

だに・すら・さへ

禽獸にだに若かず。

生死すら明らかならず。

道險しく、雨さへ降る。

右の例のやうに、だに・すらは、最も意味の輕いものを表面にあらはして、意味の重いものを言外に含ませ、さへは既にある上に更に加る意をあらはす。

口語では右の區別はなく、さへが一般に使はれる。

禽獸にさへ及ばない。

生死さへ明らかでない。

八　ばや・なむ

ばや・なむ

共に動詞・助動詞の未然形に添ひ、願望の意をあらはす。

我も行かばや。

花も咲かなむ。

母に知らせばや。

ばやは自分の希望をあらはし、なむは他に對する注文をあらはす。即ち右の例で、「行かばや」は「行きたいものだ」といふ意、「咲かなむ」は「咲いてほしいものだ」といふ意となる。

又「花も咲きなむ」のやうに連用形に添ふなむは、完了の助動詞ぬの未然形に未來の助動詞むの添うたもので、助詞のなむとは違ふ。

九　やか

や・か

（イ）疑の意をあらはす場合　活用語に添ふ時、やは終止形に、かは連體形に添ふべきである。

果してその人なりや。

果してその人なるか。

但し、今はやも連體形に添ふことが多い。

父に似たるや、母に似たるや。

（ロ）上に疑問の語の來る場合　下にかを使ふべきである。

五と三との和は幾何なるか。

これを如何にすべきか。

但し、今はかやうな場合にもやを使つても差支ない。

幾何なるや。

如何にすべきや。

（ハ）反語の意をあらはす場合

豈我のみならんや。

誰かは感激せざらん。

一〇　係結の法則

係結の法則

（イ）水ぞ清き。

彼なむ行ける。
花や散れる。
誰かある。
(ロ)　水こそ清けれ。

右の例のやうに文語では、ぞ・なむ・や・かが文の途中に來る時は、それに應ずる結びは連體形となり、こそが文の途中に來る時は、それに應ずる結びは已然形となる。この法則を係結の法則といふ。

但し、その文が接續の助詞によつて、下に續けられる場合は、係結の法則は消えて、その助詞の接續の法則に從ふ。

練習題

一、次の文中から助詞を選び出せ。

(1)　お前でもこの位のことは出來よう。
(2)　何分にも道が遠いから行くのはやめた。
(3)　君さへよければそれでよいではないか。
(4)　余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

二、次の文中の傍線ある助詞の意味をいへ。

(1)　一人も殘さず討取つて、此の度の賞に預からばや。
(2)　波風やまねば舟出さず。
(3)　雨は降りたるも風は吹かざりき。
(4)　限ある世に限りなきことを思ふべきかは。
(5)　飛びて行かれん術もがな。
(6)　はや、御馬にて彼處におはしまさなん。

自修題

一、次の文中から助詞を選び出せ。

(1) その人、かたちより心なんまさりたる。
(2) 彼だにあらば救はれしを、口惜しきことなりき。
(3) 路いと悪しきに日さへ暮れぬ。
(4) 禽獣すら恩を知る。況んや人に於てをや。
(5) 山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも。
(6) 東風吹かば香おこせよ梅の花主なしとて春なわすれそ。

二、次の文中の誤を正し、其の理由をいへ。

(1) 彼こそ世の師表たる人物なり。
(2) 楠木正成こそ南朝第一の忠臣なりし。
(3) 友を訪ねて會はれざるぞ遺憾なれ。
(4) 明日雨降れば運動會を延期すべし。

第一〇章　品詞の轉成

品詞は或品詞が他の品詞に轉じて使はれることがある。

轉成の名詞

一、動詞から轉じたもの

(イ) 連用形から　光　戰　氷　霞　帶　眺　笑
　　あゆみ　登り　降(クダ)り　見積　手傳

(ロ) 終止形から　陽炎(カゲロフ)　角力(スマフ)　雫(シヅク)　茂(シゲル)(人名)

二、形容詞から轉じたもの

(イ) 連用形から　近くの家　遠くの村　早くより
　　遅くまで

(ロ) 終止形から　あかし(燈火)　芥子(カラシ)　すし(鮨)　正(タダシ)(人名)

三、感動詞から轉じたもの
　あはれ
四、形容詞の語幹に接尾語さ・み・けの添うたもの
　深さ　重み　寒け

轉成の代名詞

名詞から轉じたもの
　君　僕　わらは　殿下　閣下　お前

轉成の動詞

一、名詞から轉じたもの　れうる(料理)　ひとりごつ(獨言)
二、名詞を語幹とするもの　つなぐ(綱)　またぐ(股)　影る
三、形容詞を語幹とするもの　惜しむ　悲しむ　樂しむ

轉成の形容詞

動詞の未然形を語幹とするもの
　騒がし　勇まし　誇らし　狂はし　やまし(疾)

轉成の助動詞

動詞から轉じたもの
　なさる　遊ばす(口)
　たまふ　おはします　ます　奉る　候(文)

轉成の副詞

一、名詞から轉じたもの
　時々參ります。つゆ知らず。ゆめ覺えず。
二、動詞の連用形から轉じたもの
　あまり早い。たとへ死んでも。はじめ困つた。
　重ね〳〵恐れ入ります。

三、形容詞の語幹から轉じたもの

長々御邪魔致しました。　うす〳〵知つてゐます。

久々でお目にかゝりました。

副詞には右の外、強ひて殘らず、間もなく等他の品詞から合成されたものが多い。

又形容詞の連用形はすべて副詞の働をする。

水清く流る。　空青く澄む。

轉成の接續詞

轉成の接續詞

一、名詞から轉じたもの

無事勉强致し居り候間　先方に交渉致し候處

二、動詞から轉じたもの　文法及び作文

三、副詞から轉じたもの　山また山　雲か山かはた越か

轉成の感動詞

轉成の感動詞

一、代名詞から轉じたもの

これ、そんな事をしてはいかん。　それ、又失敗した。

あれ、雪が降る。　どれ、行かうか。

二、副詞から轉じたもの

さて困つた。　いやはや、恐れ入りました。

いかに、與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。

練習題

次の文中の轉成の語を選び出し、それを說明せよ。

(1) 月の光が軒端を洩れて、疊の上を明るく照らしてゐる。

(2) 月夜の靜けさに醉ひ心地になる。

(3) さて〳〵目あきは不自由だ。

(4) 向かふの山が霞に包まれて朧に見える。
(5) 喜と悲と交〻至る。
(6) 君の惠は山より高く、父母の恩は海より深し。
(7) 兄より教を受け、よく其の教を守れり。
(8) ゆめ忘れ給ふこと勿れ。

自修題

一、次の文中傍線ある語の異同を述べよ。

(1) (イ) 何事もなかりしか。
(ロ) かくこそ出で入り給ひしか。
(ハ) 召されしかば參りぬ。
(2) (イ) 波靜かなり。

(ロ) 風となり雨となりぬ。
(ハ) かの山は富士山なり。
(ニ) 鳴く鶯の聲すなり。
(3) (イ) 兒等はいづくにか行きし、はや歸らなむ。
(ロ) 夜は更けぬ、はや歸りなむ。
(ハ) 三とせすぎて、浦島は故郷に歸りけるとなむ。
(4) (イ) 月に雲なたなびきそ。
(ロ) 冬來りなば如何せまし。
(ハ) 水を賜へな。
(5) (イ) 威風堂々たり。
(ロ) 花散りたり。
(ハ) 孔子は聖人たり。

(6) (イ) あなうれしのことや。
(ロ) かしこに遊べることありや。
(ハ) 古池や蛙飛込む水の音。

(7) (イ) さることもあらん。
(ロ) 雪も消ゆらん。
(ハ) 玉の光は添はざらん。

(8) (イ) 淋しき冬よ行きねかし。
(ロ) 早く往ね。

(9) (イ) 紅葉すればや照りまさるらん。
(ハ) 姿こそ見えね、聲はまがふことなし。
(ロ) 人に見せばや。

(10) (イ) 昔紀貫之といふ歌人ありけり。

(ロ) 吉野の山の櫻咲けり。

(11) (イ) 我人に笑はる。
(ロ) 笑へる顔の愛らしさ。
(ハ) 亡き母のことのみ思はる。

(12) (イ) 父は畫を好まる。
(ニ) 東京より大阪まで。
(ロ) 義は泰山より重し。
(ハ) 酒は米より製す。

二、次の文を品詞に分け、活用語は特に其の活用をいへ。

(1) 一里ほど歩くと、疲勞よりは飢の方がひどくなつた。考へると、今日舟の中で小さい握飯を二つ食べたばかり、陸へ上つてからは水一滴飲まぬ。

(2) 月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。

(3) いつか夜も全く明けはなれて、月も星も光を朝日に讓つた。自分は夢から覺めたやうに我に返つた。しかも今見て來た富士の曉の色の淸らかさ美しさが、幻のやうに眼から消えない。

(4) 大阪より雨を冒して奈良に遊ぶ。汽車に乘りては風さへ加りて、窓をあくることもならねば、法隆寺などいふ聲を空しく聞くのみ。

(5) 天に一片の雲なき夕べ、逗子の海濱に立つて、伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとは思はれず。

主述語語

第二篇　文章篇

第一章　文の成分

主語・述語

一　犬が　走る。

二　正成は　忠臣だ。

三　山　高し。

四　花も　咲けり。

右の文に於て、犬が・正成は・山・花もは其の文の主體をなす語であるから、これを**主語**といひ、走る・忠臣だ・高し・咲けりは主語についてその動作・狀態・性質等を敍述する語であるから、これを**述語**といふ。

主語は普通體言から成り、單獨にあらはれる場合と助詞は・も・が等を伴なふ場合とある。

但し、時としては、左の例のやうに體言に準ずる語から成ることもある。

一　赤いのが　美しい。

二　過ぎたるは、及ばざるが如し。

述語は普通用言又は用言に助動詞・助詞の添うたものから成る。

但し、時としては、左の例のやうに體言又は體言に準ずる語に助動詞又は助詞の添うたものから成ることもある。

一　東京は　日本の首府である。

二　歳月　流るゝが如し。

三　汝　何者ぞ。

主語・述語は文の主成分であつて、普通これが備らねば完全な文とはいへない。

補語

一　猫が　鼠を　捕へる。

二　父は　東京に　行かれた。

三　頼朝　幕府を　鎌倉に　開く。

四　明治天皇　江戸城を　皇居と　定め給ふ。

右の例に於て、傍線を施した語は、各〻其の述語の目的をあらはし、又は述語の意味を助けて其の働を完全にする。かやうな語を**補語**といふ。

補語は體言又は體言に準ずる語から成り、必ず助詞を・に・と等を伴なふ。

補語は、述語の性質によつて必ず無ければならぬ場合と無くてよい場合とある。

修飾語

修飾語

一　美しい鳥が　ほがらかに啼く。

二　秀吉　壯大なる居城を　交通便利なる大阪に　築く。

三　山の如き波　切立ちたる岩壁に　勇ましく碎く。

右の例に於て、傍線を施した語は、各、主語・述語又は補語を修飾してゐる語である。　かやうな語を**修飾語**といふ。

修飾語の中、體言を修飾するものを**形容詞的修飾語**といひ、用言を修飾するものを**副詞的修飾語**といふ。

形容詞的修飾語

副詞的修飾語

形容詞又は形容詞に準ずるものから成る。

激しい雷が終日鳴りひゞいた。

有益な本を讀め。

蒔かぬ種は生えぬ。

庭の櫻咲けり。

副詞的修飾語は副詞又は副詞に準ずるものから成る。

一羽の鳶が悠然と飛んでゐる。

こそ〳〵話してゐるのは誰ですか。

彼は行くとして可ならざるなし。

青く澄める水を湛へたり。

主語・補語の修飾語は、直接其の上につくが、述語の修飾語の中の副詞的修飾語は、他語を隔てて修飾する場合がある。

一　突然　濃霧が一行を包んだ。

二　全く　私は殘念に思ひます。

獨立語

三　彼は　深更まで　文を書續けたり。

右のやうな場合は、修飾語は其の下全部を修飾してゐるものと見てよい。

獨立語

一　太郎や、お前もお出で。

二　あはや、子供等は河に落入らんとす。

三　雨ははげしく、且、空はくらし。

右の例に於て傍線を施した語は、主語・述語・補語又は修飾語の何れにも屬せぬものである。かやうな語を**獨立語**といふ。

練習題

次の文の主語・述語・補語・修飾語・獨立語を示し、修飾語は其の種類と其の修飾する語とをいへ。

(1)　おや、北斗七星が半分杉林にかくれた。

(2)　向かふに見えるのが私の學校です。

(3)　生徒は蜘蛛の子を散らしたやうに散つた。

(4)　日本、日本、お前は希望にかゞやいてゐる。

(5)　たまに散る落葉の音ががさり〳〵聞える。

(6)　會長が優勝旗を授與せられた。

(7)　微雨はら〳〵と降りいでぬ。

(8)　熾んなる火は、濡れたる物を忽ち乾かす。

(9)　國旗は實に國家を代表する標識なり。

(10)　優美溫雅なる山川は、常に瞼上に愛を滿ふるが如し。

第二章　文の成分の位置及び省略

一　正常の場合

一　美しい花が　はら〳〵と散る。

二　偉大なる飛行船　廣漠たる大空を　悠々と飛ぶ。

右の例で明らかなやうに、文の成分の正常な位置は次の通りである。

一（修飾語）主語……（修飾語）述語。

二（修飾語）主語……（修飾語）補語……（修飾語）述語。

但し、述語の修飾語中の副詞的修飾語が、時に補語又は主語の上に來ることは、前章で說いた通りである。

二　倒置の場合

一　私の机の上に　ペンが　ある筈だ。

二　ありませんね、そんな物は。

三　善いかな、言や。

四　かゝる善言を　誰か信ぜざらん。

右は語調を整へ、又は語勢を強める爲に、文の成分の位置を變へたものである。

三　省略の場合

（イ）主語の省略

一（私は）明日お訪ねします。

二（人々）此の處に塵芥棄つべからず。

（ロ）述語の省略

一　あなたは、どちらへ。（いらつしやいますか）

二　千里の道も一歩より。（始まる）

（ハ）**補語**の省略

一　皆が其の本を買ひましたから、私も（その本を）買ひました。

二　神よ、願はくは（我に）幸あらしめたまへ。

（ニ）**其の他一部分**の省略

一　彼は酒（を）も煙草（を）も飲まない。

二　私はそんな事（を）は知りません。

三　樂は苦の種（なり）、苦は樂の種（なり）。

右の例のやうに、文は冗長を避け、又は意味を強める爲に、其の成分を省略することがある。

練習題

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正常の位置におけ。

(1) 目をあけて、そこにどんな世界をお前は見たか。

(2) 貴賤の別なく、子を思ふ親の心は人も我も同じこと。

(3) ゆふべ不思議な夢を見ました。

(4) よい工夫はないかね。あつたら教へてくれたまへ。

(5) 三人は「どうかもう一曲」としきりに賴んだ。

(6) よき日は明けぬ、さわやかに。

(7) 我ははげまん、今日の業。

(8) 料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。

節
從屬節
對立節

第三章　節

一　雪の降る景色は美しい。
二　神戸港は　海が深い。
三　花笑ひ、鳥歌ふ。
四　言ふは易く、行ふは難し。

右の例のやうに、或文が全文の中に含まれてゐる場合、其の含まれてゐる文を**節**といふ。

右の一・二の例のやうに、節が全文中に從屬して其の成分をなす場合、これを**從屬節**といふ。

又右の三・四の例のやうに、節が各、從屬關係をなすことなく、幾つかの節が對立的に相寄つて一文をなす時、それ等の節を**對立節**

體言節
用言節

といふ。

從屬節には左の四種がある、

體言節

一　價の高いのが　貴いわけでない。
二　我々は　時の移るを　知らざりき。

右の例のやうに、體言に準じて文の主語・補語の働をする節を**體言節**といふ。

用言節

一　鶴は　首が長い。
二　蟻は　性勤勉なり。

右の例のやうに、用言に準じて文の述語の働をする節を**用言節**といふ。

形容詞節

副詞節

形容詞節

一　私は　陽炎の燃える春の日が　好きです。

二　月明かき夜は　散歩に　よし。

右の例のやうに、形容詞に準じて形容詞的修飾語となる節を**形容詞節**といふ。

副詞節

一　子供らが　節面白く　歌つてゐる。

二　櫻の花　色美しく　咲けり。

右の例のやうに、副詞に準じて副詞的修飾語となる節を**副詞節**といふ。

練習問題

次の文中から節を選び出し、其の節の種類をいへ。

(1) 今日雪が降らうとは思はなかつた。

(2) 私は日の出ないうちに起きる。

(3) 支那は面積が廣く人口が多い。

(4) 我が國は風光が極めて明媚である。

(5) 雨が降ると地が固まる。

(6) 寒からぬ雪、雲なき空より降る。

(7) 水清ければ、底の眞砂も數へつべし。

(8) 天高く馬肥ゆる時來れり。

(9) 旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催す。

(10) 秋の風は泣き、冬の風は怒る。

自修題

次の文中から節を選び出し、其の節の種類をいへ。

(1) 私たちは、そこで夜があけるのを待ちました。
(2) 空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透る爲である。
(3) 花を觀るのは春で、紅葉を眺めるのは秋だ。
(4) 日本人は忠義の心が深い。
(5) 聲は猫の鳴くのに似てゐる。
(6) 誰か德高き人を敬はざらん。
(7) 家居のつきづきしきこそ興あるものなれ。
(8) 箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ。

主部
述部

第四章　主部・述部・補部・敍述部

主部

一 雲霞の如き大軍が　押寄せた。
二 飛行機の群飛ぶのは　實に壯快だ。
三 雨の降る夜は　淋し。

右の例のやうに、主語に修飾語が添ふ場合、又は主語が節から成り又は節を含む場合、「雲霞の如き大軍が」「飛行機の群飛ぶのは」「雨の降る夜は」といふ全體を**主部**といふ。

述部

一 蓮の花が　涼しさうに　咲出た。
二 私の祖父は　なか〳〵　元氣が　宜い。

三　大阪は　交通の便利なる土地なり。

右の例のやうに、述語に修飾語が添ふ場合、述語が節から成り又は節を含む場合、「涼しさうに咲出た」「なか〳〵元氣が宜い」「交通の便利なる土地なり」といふ全體を**述部**といふ。

補部

一　母親が　子供の泣くのを　あやしてゐる。

二　健全なる精神は　健全なる身體に　宿る。

三　磯邊の船、　潮のさし來る時を　待てり。

右の例のやうに、補語に修飾語が添ふ場合、又は補語が節から成り又は節を含む場合、「子供の泣くのを」「健全なる身體に」「潮のさし來る時を」といふ全體を**補部**といふ。

敍述部

主語（又は主部）に對して、補語（又は補部）と述語（又は述部）とを合はせて**敍述部**といふ。

練習題

次の文の主部・述部・補部・敍述部を示せ。

(1)　涼しい風がそよ〳〵と吹いて來る。

(2)　大小さま〴〵の馬が元氣よくかけまはつてゐる。

(3)　黃金のやうな月が出て來た。

(4)　もじや〳〵と毛の生えた腕がぬつと出た。

(5)　彼所の森こそ神の鎭ります所なれ。

(6)　月の出でたる又なくうれし。

(7)　日本語は日本人の精神的血液なり。

(8)　荒廢せる城址は、狐狸の棲處となれり。

自修題

次の文の主部・述部・補部・敍述部を示せ。

(1)　山の裾があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう
(2)　日本の櫻は、其の色が極めてあつさりしてゐる。
(3)　雪をいたゞいた富士が、淡くほのかに聳えてゐる。
(4)　身をきるやうな寒い風が、りう〳〵と笠を吹く。
(5)　野も山も美しき朝日の光を浴びたり。
(6)　月光は隈なく庭の面を照らす。
(7)　若やかに麗しき聲は、水の如く流れたり。
(8)　華やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなりぬ。

第五章　文の種類

單文

一　鳥が　啼く。
二　涼しい風が　そよ〳〵と吹いて來る。
三　巡査　賊を　捕ふ。

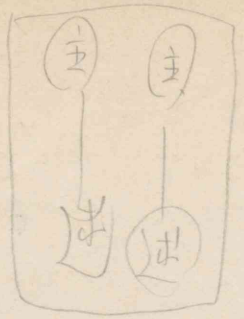
右の例のやうに、主語と述語との關係が一通りであつて、一文の中に節を含むことのないものを**單文**といふ。

一　正成と義貞とは　建武中興の功臣である。
二　私は　鉛筆とペンとノートとを　買つた。
三　私は　行はうと思つたことを行ひ盡くし　語らうと思つたことを語り盡くした。

四　少女は　且、笑ひ且、泣く。

右の例のやうに、主語・述語・補語が幾つも重なつたり、又は補語に述語の添うたものが幾つも重なることがあるが、主語と述語との關係は同種類のものであつて、別種のものではない。これもやはり單文である。

複文



複文（從屬節）

一　飛行機の飛交ふのは　壯快だ。

二　月の明るい夜は　散歩に　よい。

三　日本海は　波が荒い。

四　鮎は　瀬の早きを　喜ぶ。

五　歲月は　水の流るゝが如く　過去る。

六　天氣淸朗なれども　波高し。

文重

文主

右の例のやうに、從屬節を含む文を**複文**といふ。

右の例の三のやうに、節が述部となつてゐる場合、日本海はといふ全文の主語は、特に**文主**といふ。

重文（對立節）

一　松は青く、　砂は白い。

二　兄は庭を掃き、　弟は水を汲む。

三　風雨烈しく、　道は暗く、　提灯も消えたり。

右の例のやうに、對立節の相寄つて成る文を**重文**といふ。

練習題

次の文の種類をいひ、其の構造を說明せよ。

(1)　月の光は慰安の光である、慈愛の光である。

(2) 風の音も、水の音も、車馬の音も、人の足音も、全く消えはてた。
(3) 天氣のよい日は暑いし、雨の降る日は鬱陶しい。
(4) 銀杏が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いた樣に明るい。
(5) 東寺の塔は吾を迎へて立ち、鴨川の水は吾を待ちて歌ふ。
(6) 蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。

自修題

一、次の文の種類をいひ、其の構造を説明せよ。

(1) 村の人が野菜や炭や薪を馬や車に積んでゐる。
(2) 我等の選出した二名の選手は、東京へ向かつて出發した。
(3) 爛漫と咲亂れた櫻花の、山を埋め、谷に滿ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美である。
(4) あるゝかと見ればなぎゆく海原の浪こそ人の世に似たりけれ。
(5) 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出沒する夜景も、亦一段の趣あり。
(6) 觀光の外人は、我が風光の明媚なるを見て、世界の公園の稱の空しからざるを知れり。

二、次の和歌中の主語・述語を示せ。なほ、節を含めるものは、其の節の主語を指示せよ。

(1) むつまじく枝をかはして咲く梅もさかりあらそふ色は見えけり。
(2) すく〳〵と生ひ立つ麥に腹すりて燕飛びくる春の山畑。
(3) 古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと。
(4) 散る花をのせてかへりぬ渡舟むかひの岸に人はおろして。

自修題補遺

一、次の問に答へよ。

(1) 動詞の活用と形容詞の活用との差異をいへ。

(2) カ變・サ變の動詞の文語と口語との差異をいへ。

(3) 六つの活用形がすべてちがつてゐる動詞は何々か。

(4) 助動詞べし・る・らる・むの各〻の示すすべての意味を例をあげて示せ。

(5) 打消の助動詞をすべて擧げ、其の意味の異同をいへ。

(6) 文中で、指定の助動詞のなりと咏嘆の助動詞のなりと形容動詞の語尾なりとは何によつて區別するか。

(7) 文中で、助詞のなんと助動詞のなとんと連續したものとは、何によつて區別するか。

(8) 係結の法則とはどんなことか例をあげていへ。

(9) 音便の種類を例をあげていへ。

(10) 助詞ばの用法についていへ。

(11) 複數を示す接尾語を知つてゐるだけいへ。

(12) 崇敬の意を示す助動詞及び接頭語をいへ。

二、次の文中傍線ある語の品詞名をいへ。

(1) 猛き人も遂には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。

(2) うるはしき日は夢の如く消えさりて、我が思のみぞ獨り老いにける。

(3) 君の行ふところ或は君をあやまらむ。

(4) 鶯は谷の古巣を出でぬともわが行方をば忘れざらなむ。

(5) 天然の美は更に人工の美よりすぐれたり。

三、次の文中の活用語を指摘し、其の種類及び活用をいへ。

(1) 良からうとは思はなかつたのです。

(2) 幾匹とも知れぬ鳥が裏の森で騒ぎたててゐる。

(3) 彼は忙しいのではない。

(4) 皆さんはあの涙ぐましい働を御存じでせう。

(5) おのが身はかへりみずして人のため盡くすぞ人の務なりける。

(6) 貌を正すは心を正す事なり。氣高く美しき姿勢をとれるときは、心おのづから氣高く美しくなるべし。貌を亂し姿を崩す時は自ら亂れ來る。古人が禮儀を重んじたるは、この理を知り居たればなり。

四、次の文中の動詞と助動詞との接續及び助動詞相互の接續を説明せよ。

(1) うなぎ釣る舟たゞ一つありしかど、いつしかそれも見えずなりけり。

(2) 速に首を刎ねらるべう候。

五、次の文中誤あらば正し、其の理由をいへ。

(1) そのくらゐのことは笑ふてすませたらよかろうと思ふ。

(2) こんな靜かな部屋におり、これほど本を持つてゐながら、積むでおくだけで、讀むでみやうといふ氣はないやうです。

(3) 夕飯を終つたら散歩にでかけましよう。

(4) そうなればかうしやうと考える。

(5) 氣の合ふた者四五人ぐらい行こうじやないか。

(6) 松葉が一面に浮かむで水を蔽ふてゐるので、一寸池があるように見へ無い。

(7) よおこそお出で下さいまして、ありがとふございます。

六、次の文の構成を説明し、其の文の種類をいへ。

(1) 今年は枝が折れるほど實がなりました。

(2) 彼は何時もとは相手の樣子が違つてゐることに氣付いた。

(3) 太郎や、火燵の火は消えたかね。

(4) 智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまでに類のない珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

(5) 慾深き人は其の心いつも貧しく、欲なき人は其の心常に富めり。

(6) 規模の雄大にして建築の宏壯なる、實に天下に冠たり。

七、次の文語文及び口語文に相當する、口語文及び文語文を記せ。

(イ) 暫く待たせて後面會せむ。(文語)

(ロ) 風吹けば落花地に散りしきたり。(文語)

(ハ) 一旦約束すればもう變へまい。(口語)

(ニ) そんなに寒ければ外へ出るな。(口語)

八、次の各項の下にそれ〴〵を含む短文を一つづつ記入せよ。

(イ) 完了の助動詞「つ」の連體形。

(ロ) 形容詞「貧し」の已然形。

(ハ) 口語動詞「枯れる」の連體形。

(ニ) 口語使役の助動詞「せる」の連體形。

改訂

中學國文典

上級用 終

附錄　文法上許容ニ關スル事項

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ。

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ。

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四　「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ。

五　「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ(セ)ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六　「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ。

例　罪サル。

評サル。

解釋サル。

七　「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ。

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各、其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九　てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

一〇　市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例　有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

二　てにをはノ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルヽトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三　てにをはノ「ト」ノ動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルヽト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三　語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例　月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四　上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例　誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五　てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ。

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ附スルモ(ストモ(スレドモ))之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(クトモ(ケレドモ))應募者ハ多カルベシ。

一六　「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　イハユル哺乳獸ナルモノ。

顏回ナルモノアリ。

サ變	カ變	下一段	下二段													
		カ	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア
爲	來	蹴る	植うる	枯るる	消ゆる	譽むる	述ぶる	堪ふる	兼ぬる	撫づる	捨つる	混ずる	載する	投ぐる	受くる	得る
(す)	(く)	(け)	う	か	き	ほ	の	た	か	な	す	ま	の	な	う	(う)
せ	こ	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
し	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
す	く	ける	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う
する	くる	ける	うる	るる	ゆる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる
すれ	くれ	けれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ	うれ
せよ	こよ	けよ	ゑよ	れよ	えよ	めよ	べよ	へよ	ねよ	でよ	てよ	ぜよ	せよ	げよ	けよ	えよ

サ變	カ變	下一段														
		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	カ	ア
爲る	來る	植ゑる	枯れる	消える	譽める	述べる	堪へる	兼ねる	撫でる	捨てる	混ぜる	載せる	投げる	蹴る	受ける	得る
(す)	(く)	う	か	き	ほ	の	た	か	な	す	ま	の	な	(け)	う	(え)
せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	け	え
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	け	え
する	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	ける	える
する	くる	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	ける	える
すれ	くれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ	けれ	えれ
せよ	こい	ゑよ(ろ)	れよ(ろ)	えよ(ろ)	めよ(ろ)	べよ(ろ)	へよ(ろ)	ねよ(ろ)	でよ(ろ)	てよ(ろ)	ぜよ(ろ)	せよ(ろ)	げよ(ろ)	けよ(ろ)	けよ(ろ)	えよ(ろ)

動詞活用表

第一表

文語

種類	行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	カ	書く	か／く	か	き	く	く	け	け
	サ	槽す	さ／す	さ	し	す	す	せ	せ
	ガ	押ぐ	が／ぐ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	タ	打つ	た／つ	た	ち	つ	つ	て	て
	ハ	買ふ	は／ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	バ	飛ぶ	ば／ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	マ	讀む	ま／む	ま	み	む	む	め	め
	ラ	降る	ら／る	ら	り	る	る	れ	れ
ナ變		死ぬ	な／ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ變		有り	あ／り	ら	り	り	る	れ	れ
上二段	カ	起きる	か／きる	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
	ガ	過ぎる	が／ぎる	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ(ろ)
	タ	落ちる	た／ちる	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ろ)
	ダ	閉ぢる	だ／ぢる	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ(ろ)
	ハ	強ひる	は／ひる	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)
	バ	延びる	ば／びる	び	び	びる	びる	びれ	びよ(ろ)
	マ	試みる	み／みる	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)
	ヤ	老いる	や／いる	い	い	いる	いる	いれ	いよ(ろ)
	ワ	懲りる	わ／りる	り	り	りる	りる	りれ	りよ(ろ)
	ア	居る	あ／る	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ(ろ)
	ナ	似る	な／る	に	に	にる	にる	にれ	によ(ろ)
	タ	落ちる	た／ちる	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ろ)
	ガ	過ぎる	が／ぎる	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ(ろ)
	カ	著る	か／きる	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
上一段	カ	起きる	か／きる	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
	ガ	過ぎる	が／ぎる	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ(ろ)
	タ	落ちる	た／ちる	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ろ)
	ダ	閉ぢる	だ／ぢる	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ(ろ)
	ハ	強ひる	は／ひる	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)
	バ	延びる	ば／びる	び	び	びる	びる	びれ	びよ(ろ)
	マ	試みる	み／みる	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)
	ヤ	老いる	や／いる	い	い	いる	いる	いれ	いよ(ろ)
	ワ	懲りる	わ／りる	り	り	りる	りる	りれ	りよ(ろ)
	ア	居る	あ／る	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ(ろ)
下二段	カ	受ける	か／ける	け	け	ける	ける	けれ	けよ(ろ)
	ガ	投げる	が／げる	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ(ろ)
	サ	載せる	さ／せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(ろ)
	ザ	混ぜる	ざ／ぜる	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ(ろ)
	タ	捨てる	た／てる	て	て	てる	てる	てれ	てよ(ろ)
	ダ	撫でる	だ／でる	で	で	でる	でる	でれ	でよ(ろ)
	ハ	兼ねる	は／ねる	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ(ろ)
	ナ	堪える	な／える	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)
	ア	得る	あ／る	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)

口語

種類	行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	カ	書く	か／く	か	き	く	く	け	け
	サ	槽ぐ	さ／ぐ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	ガ	押す	が／す	さ	し	す	す	せ	せ
	タ	打つ	た／つ	た	ち	つ	つ	て	て
	ナ	死ぬ	な／ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	ハ	買ふ	は／ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	バ	飛ぶ	ば／ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	マ	讀む	ま／む	ま	み	む	む	め	め
	ラ	降る	ら／る	ら	り	る	る	れ	れ
	ラ	有る	あ／る	ら	り	る	る	れ	れ
上二段	カ	起きる	か／きる	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
	ガ	過ぎる	が／ぎる	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ(ろ)
	タ	落ちる	た／ちる	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ろ)
	ダ	閉ぢる	だ／ぢる	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ(ろ)
	ハ	強ひる	は／ひる	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)
	バ	延びる	ば／びる	び	び	びる	びる	びれ	びよ(ろ)
	マ	試みる	み／みる	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)
	ヤ	老いる	や／いる	い	い	いる	いる	いれ	いよ(ろ)
	ワ	懲りる	わ／りる	り	り	りる	りる	りれ	りよ(ろ)
	ア	居る	あ／る	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ(ろ)
	ナ	似る	な／る	に	に	にる	にる	にれ	によ(ろ)
	タ	落ちる	た／ちる	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ろ)
	ガ	過ぎる	が／ぎる	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ(ろ)
	カ	著る	か／きる	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
上一段	ハ	干る	は／ひる	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)
	バ	延びる	ば／びる	び	び	びる	びる	びれ	びよ(ろ)
	マ	試みる	み／みる	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)
	ヤ	老いる	や／いる	い	い	いる	いる	いれ	いよ(ろ)
	ワ	懲りる	わ／りる	り	り	りる	りる	りれ	りよ(ろ)
	ア	居る	あ／る	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ(ろ)
下二段	カ	受ける	か／ける	け	け	ける	ける	けれ	けよ(ろ)
	ガ	投げる	が／げる	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ(ろ)
	サ	載せる	さ／せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(ろ)
	ザ	混ぜる	ざ／ぜる	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ(ろ)
	タ	捨てる	た／てる	て	て	てる	てる	てれ	てよ(ろ)
	ダ	撫でる	だ／でる	で	で	でる	でる	でれ	でよ(ろ)
	ハ	兼ねる	は／ねる	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ(ろ)
	ナ	堪える	な／える	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)
	ア	得る	あ／る	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)

第一表　動詞活用表

文語

種類	行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	カ	書く	かく	かか	かき	かく	かく	かけ	かけ
四段	ガ	漕ぐ	がぐ	がが	がぎ	がぐ	がぐ	がげ	がげ
四段	サ	押す	さす	ささ	さし	さす	さす	させ	させ
四段	タ	打つ	たつ	たた	たち	たつ	たつ	たて	たて
四段	ハ	買ふ	はふ	はは	ひひ	ふふ	ふふ	へへ	へへ
四段	バ	飛ぶ	ばぶ	ばば	びび	ぶぶ	ぶぶ	べべ	べべ
四段	マ	読む	まむ	まま	みみ	むむ	むむ	めめ	めめ
四段	ラ	降る	らる	らら	りり	るる	るる	れれ	れれ
ナ變		死ぬ	なぬ	なな	にに	ぬぬ	ぬぬ	ねね	ねね
ラ變		有り	らり	らら	りり	り	る	れ	れ
上二段	カ	起きる	おき	おき	きき	きる	きる	きれ	きよ
上二段	ガ	過ぎる	おぎ	おぎ	ぎぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
上二段	タ	落ちる	おち	おち	ちち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
上二段	ダ	閉ぢる	とぢ	とぢ	ぢぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
上二段	ナ	似る	に	に	にに	にる	にる	にれ	によ
上二段	ハ	強ひる	しひ	しひ	ひひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
上二段	バ	延びる	びび	びび	びび	びる	びる	びれ	びよ
上二段	マ	試みる	みみ	みみ	みみ	みる	みる	みれ	みよ
上二段	ヤ	老いる	おい	おい	いい	いる	いる	いれ	いよ
上二段	ラ	懲りる	こり	こり	りり	りる	りる	りれ	りよ
上一段	ワ	居る	ゐる	ゐる	ゐる	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
上一段	ヤ	射る	い	い	いる	いる	いる	いれ	いよ
上一段	マ	見る	み	み	みる	みる	みる	みれ	みよ
上一段	ハ	干る	ひ	ひ	ひる	ひる	ひる	ひれ	ひよ
上一段	ナ	似る	に	に	にる	にる	にる	にれ	によ
上一段	ダ	閉ぢる	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
上一段	タ	落ちる	ち	ち	ちる	ちる	ちる	ちれ	ちよ
上一段	ガ	過ぎる	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
上一段	カ	著る	き	き	きる	きる	きる	きれ	きよ
下二段	ア	得	え	え	え	える	える	えれ	えよ
下二段	カ	受ける	け	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段	カ	投げる	げ	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
下二段	ガ	載せる	せ	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
下二段	サ	混ぜる	ぜ	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
下二段	ザ	捨てる	て	て	て	てる	てる	てれ	てよ
下二段	タ	撫でる	で	で	で	でる	でる	でれ	でよ
下二段	ダ	兼ねる	ね	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
下二段	ナ	堪へる	へ	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
下二段	ハ	述べる	べ	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ
下二段	バ	愛める	め	め	め	める	める	めれ	めよ
下二段	マ	消える	え	え	え	える	える	えれ	えよ
下二段	ヤ	枯れる	れ	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
下二段	ラ	植る	ゑ	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
下一段	カ	蹴る	け	け	け	ける	ける	けれ	けよ
カ變		來	こ	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ變		爲	す	せ	し	す	する	すれ	せよ

口語

種類	行	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	カ	書く	かく	かか	かき	かく	かく	かけ	かけ
四段	ガ	漕ぐ	がぐ	がが	がぎ	がぐ	がぐ	がげ	がげ
四段	サ	押す	さす	ささ	さし	さす	さす	させ	させ
四段	タ	打つ	たつ	たた	たち	たつ	たつ	たて	たて
四段	ナ	死ぬ	なぬ	なな	にに	ぬぬ	ぬぬ	ねね	ねね
四段	ハ	買ふ	はふ	はは	ひひ	ふふ	ふふ	へへ	へへ
四段	バ	飛ぶ	ばぶ	ばば	びび	ぶぶ	ぶぶ	べべ	べべ
四段	マ	読む	まむ	まま	みみ	むむ	むむ	めめ	めめ
四段	ラ	降る	らる	らら	りり	るる	るる	れれ	れれ
四段	ラ	有る	ある	あら	りり	る	る	れ	れ
上一段	カ	著る	き	きき	きき	きる	きる	きれ	きよ
上一段	ガ	過ぎる	ぎ	ぎぎ	ぎぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
上一段	タ	落ちる	ち	ちち	ちち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
上一段	ダ	閉ぢる	ぢ	ぢぢ	ぢぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
上一段	ナ	似る	に	ニニ	にに	にる	にる	にれ	によ
上一段	ハ	干る	ひ	ひひ	ひひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
上一段	バ	延びる	び	びび	びび	びる	びる	びれ	びよ
上一段	マ	試みる	み	みみ	みみ	みる	みる	みれ	みよ
上一段	ヤ	老いる	おい	おい	いい	いる	いる	いれ	いよ
上一段	ラ	懲りる	こり	こり	りり	りる	りる	りれ	りよ
上一段	ワ	居る	ゐる	ゐる	ゐる	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
下一段	ア	得る	え	え	え	える	える	えれ	えよ
下一段	カ	受ける	け	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下一段	カ	蹴る	け	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下一段	ガ	投げる	げ	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
下一段	サ	載せる	せ	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
下一段	ザ	混ぜる	ぜ	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
下一段	タ	捨てる	て	て	て	てる	てる	てれ	てよ
下一段	ダ	撫でる	で	で	で	でる	でる	でれ	でよ
下一段	ナ	兼ねる	ね	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
下一段	ハ	堪へる	へ	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
下一段	バ	述べる	べ	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ
下一段	マ	愛める	め	め	め	める	める	めれ	めよ
下一段	ヤ	消える	え	え	え	える	える	えれ	えよ
下一段	ラ	枯れる	れ	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
下一段	ワ	植る	ゑ	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
カ變		來	こ	こ	き	く	くる	くれ	こい
サ變		爲	す	せ	し	す	する	すれ	せよ

第二表.

形容動詞活用表

	種類	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	第一	（烈しかり）	烈しか	ら	り		る		れ
	第二	靜かなり	靜かな	ら	り	り	る	れ	れ
	第三	堂々たり	堂々た	ら	り	り	る	れ	れ
口語	種類	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	第一	（烈しい）	烈し	から	かつ				
	第二	靜かだ	靜か	だら	だつ	だ	な	なら	

形容詞活用表

	種類	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	ク活用	高し	たか	く	く	し	き	けれ	
	シク活用	樂し	たの	しく	しく	し	しき	しけれ	
口語	種類	語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	ク活用	高い	たか		く	い	い	けれ	
	シク活用	樂しい	たの		しく	しい	しい	しけれ	

動詞音便表

	イ音便		ウ音便	促音便				撥音便		
	き	ぎ	ひ	(き)	ち	ひ	り	に	び	み
て(で)	咲いて	泳いで	問うて	(行って)	勝って	買って	賣って	死んで	飛んで	怨んで
た(だ)	咲いた	泳いだ	問うた	(行った)	勝った	買った	賣った	死んだ	飛んだ	怨んだ
たり(だり)	咲いたり	泳いだり	問うたり	(行ったり)	勝ったり	買ったり	賣ったり	死んだり	飛んだり	怨んだり

形容詞音便表

イ音便	ウ音便
き	く
し	し
き	く
善い	高い
悲しい	樂しい
哉	哉

第三表

文語動詞活用識別表

上一段	著る（十）　似る　煮る　干る（ヒ）　見る（顧みる・惟みる・鑑みる・試みる）　射る　鑄る　居る（キ）　率ゐる
下一段	蹴る
カ變	く（來）
サ變	す（爲）　他語にずがついたもの
ナ變	死ぬ　往ぬ
ラ變	有り　居り　侍り　形容動詞
四段	打消のずがアの段の音につく
上二段	打消のずがイの段の音につく
下二段	打消のずがエの段の音につく

動詞假名遣識別表

ア行	得……下二段
ワ行	植う　飢う　据う……下二段 居る　率ゐる……上一段
ヤ行	老ゆ　悔ゆ　報ゆ……上二段 其の他終止形がゆとなるもの……下二段
ハ行	右の外
ザ行	混ず……下二段 サ變の語尾の濁るもの
ダ行	右の外

動詞音便表

	イ音便	ウ音便	促音便			
	き　ぎ	ひ	き（き）　ち　ひ　り　に	て（で）	た（だ）	たり（だり）
	咲いて　泳いで	問うて	行って（行って）　勝って　買って　賣って	咲いた　泳いだ	問うた	咲いたり　泳いだり
	咲いた　泳いだ	問うた	行った（行った）　勝った　買った　賣った	死んで	死んだ	死んだり
	咲いたり　泳いだり	問うたり	行ったり（行ったり）　勝ったり　買ったり　賣ったり			

形容詞音便表

イ音便	ウ音便
き　し	く　し
善い　哉　悲しい　哉	高う　樂しう

第三表

文語動詞活用識別表

上一段	著る　似る　煮る　干る　見る（顧みる・惟みる・鑑みる・試みる） 射る　鑄る　居る　率ゐる	
下一段	蹴る	
カ變	く（來）	
サ變	す（爲）　他語にずがついたもの	
ナ變	死ぬ　往ぬ	
ラ變	有り　居り　侍り　形容動詞	
四段	打消のずがアの段の音につく	
上二段	打消のずがイの段の音につく	
下二段	打消のずがエの段の音につく	

動詞假名遣識別表

ア行	得……	下二段
ワ行	植う　飢う　据う……	下二段
	居る　率ゐる……	上一段
ヤ行	老ゆ　悔ゆ　報ゆ……	上二段
	其の他終止形がゆとなるもの……	下二段
ハ行	右の外	
ザ行	混ず……	下二段
	サ變の語尾の濁るもの	
ダ行	右の外	

動詞音便表

イ音便	き　ぎ	咲いて　泳いで	咲いた　泳いだ	咲いたり　泳いだり
ウ音便	ひ	問うて	問うた	問うたり
促音便	き（ぎ）　ち　ひ　り	勝って（行って）　買って　賣って	勝った（行った）　買った　賣った	勝ったり（行ったり）　買ったり　賣ったり
撥音便	に　び　み	死んで　飛んで　怨んで	死んだ　飛んだ　怨んだ	死んだり　飛んだり　怨んだり
		て（で）	た（だ）	たり（だり）

形容詞音便表

イ音便	き　し　善い　悲しい　哉
ウ音便	く　し　高　樂し　う

況比・連體・體言（が・の・ヲ・ハ・モ・ナム）	望願・未然・連用	嘆呼・終止（連ヲ體續ヘ）	定指・連體・體言	消打・終止（連ヲ體續ヘ）・未然
如し	ましたし	けり	たり	じざり まじ
如く	たく まほしく		たち	ざら まじく
如く	たく まほしく		たり	ざり まじく
如し	まほし	けり	たり	じ まじ
如き	たき まほしく	ける	たる	じざる まじき
	たけれ まほしけれ	けれ	たれ	じざれ まじけれ
			たれ	ざれ
やうだ	たい	ぬ ない まい	です	ぬ ない まい
やうだら			でせ	だら
やうだつ	たく		でし	だつ なく
やうだ	たい		です	だ ない まい
やうな	たい			ぬ(ん) ない まい
やうなら	たけれ		なら	ぬ(ん) ない なけれ
				ね なけれ
體連體言（のヲ抜ク）	連用		連體・體言	未然（ツカヌニハ） （終止四段以外未然）

第四表

助動詞の活用と接續表

種類	活用語	文語 未然	文語 連用	文語 終止	文語 連體	文語 已然	文語 命令	文語 接續	口語 活用語	口語 未然	口語 連用	口語 終止	口語 連體	口語 假定	口語 命令	口語 接續
時 完了	つ	て な たら	て に たり	つ ぬ たり	つる ぬる たる	つれ ぬれ たれ	てよ ね	連用 連用（ナ變ニハツカズ） 連用（已然四段未然サ變）	た	たら	たり	た	た			連用
時 過去	き			き けり	し ける	しか けれ		連用（カ變・サ變ニ特例アリ）								未然（四段） 未然（右以外）
時 未來	む			む	む	め		未然	う よう			う よう				
受身	る	れ られ	れ られ	る られる	るる られる	るれ られれ	れよ られよ	未然（四段・ナ變・ラ變） 未然（右以外）	れる られる	れ られ	れ られ	れる られる	れる られる	れれ られれ	れよ れろ られよ られろ	未然（四段・ナ變・ラ變） 未然（右以外）
可能	る	れ られ べから	れ られ べかり	る られる べし	るる られる べき	るれ られれ べけれ		受身ト同ジ 終止（ラ變ハ連體）	れる られる	れ られ	れ られ	れる られる	れる られる	れれ られれ		受身ト同ジ
使役	す	せ させ しめ	せ させ しめ	す さす しむ	する さする しむる	すれ させれ しめれ	せよ させよ しめよ	未然（四段・ナ變・ラ變） 未然（右以外）	せる させる	せ させ	せ させ	せる させる	せる させる	せれ させれ	せよ せろ させよ させろ	未然（四段） 未然（右以外）
崇敬	る	れ られ しめ	れ られ させ しめ	る らる す さす しむ	るる らるる する さする しむる	るれ らるれ すれ させれ しむれ	れよ られよ せよ させよ しめよ	受身使役ト同ジ	れる られる す ます	れ られ ませ	れ られ まし	れる られる ます	れる られる ます	れれ られれ ますれ	ませ まし	連用
推量	む	ら べく	らし べく	む らし べし	む らし べき	め べけれ		終止（ラ變ハ連體） 連用 未然	らしい			らしい	らしい			終止・體言
打消	ず	ざら じ まじく	ず ざり じ まじく	ず じ まじ	ぬ ざる じ まじき	ね ざれ じ まじけれ	ざれ	未然 終止（ラ變ハ連體）	ぬ ない まい			ず なく ない まい	ぬ（ん） ない	ぬ（ん） なけれ	ね	未然（有ルニハツカズ） 終止（四段）未然（右以外）
指定	なり	なら たら	なり たり	なり たり	なる たる	なれ たれ	なれ たれ	連體・體言 體言	だ です	だら でせ	だっ でし	だ です			なら	連體・體言
嘆願	なり けり			なり けり	なる ける	なれ けれ		終止（ラ變ハ連體） 連用								
願望	たし まほし	たく まほしく	たく まほしく	たし まほし	たき まほしく	たけれ まほしけれ		連用 未然	たい			たく	たい	たい	たけれ	連用
比況	なり	如く	如く	如し	如き			連體・體言（がノヲハサム）	やうだ	やうだら	やうだっ	やうだ	やうな	やうな	やうなら	連體・體言（のヲ挾ム）

文部省檢定濟
昭和十一年十二月二十七日　中學校國語漢文科

昭和十一年八月十八日印刷
昭和十一年八月二十三日發行
昭和十一年十二月十三日訂正再版印刷
昭和十一年十二月十八日訂正再版發行

【改訂中學國文典上級用】

定價金五拾貳錢

著作權所有

著作者　廣島高等師範學校附屬中學校　國語漢文研究會

發行兼印刷者　大阪市西區立賣堀南通三丁目二十一番地　京極喜太郎

發行所　東京市赤坂區新坂町六十八番地　京極書店
大阪市西區立賣堀南通三丁目
振替口座大阪八六〇四五番

發賣所　大阪市東區北久太郎町四丁目　柳原書店
電話船場（四）一四八五七番
振替口座大阪二三一番

窪野滿

広島大学図書
2000039770